

「たいせつなことは 目に見えない」

神戸国際大学 オルガニスト 伊藤 純子

サン＝テグジュペリ『星の王子さま』の中にある有名なこの言葉を、実感することができます。通常は目に見えていないものが、ふとした瞬間に目に見えるとき、「たいせつなこと」に触れた感覚になります。

皆既月食の9月8日、赤銅色の光を見たとき、そのような思いに包まれました。その炎のように燃える月は、通常は目にすることのできない「エネルギーの力」が可視化されたものであると実感したのです。

月食時は、地球と太陽と月それぞれの位置関係によって、通常とは異なる角度で光が当たるため、この時だけしか見えない光の色を発します。そのことによって目に映る赤銅色の光は、非常に強い炎が燃えているかのようになるわけです。

つまり、いつもは目に見えなくても、強い炎のような光のエネルギー自体は、どのような時でも常にこの世に存在しているもののなのに、それがふと可視化されると、その存在に改めて気付かされる、ということになります。

人々がこの赤銅色を見た感想として「幻想的」というワードを頻繁に目にしますが、「幻想的」に感じるのは、普段目に見えないものであるからという理由によるものかと思います。現実味を帯びないために幻想的に感じて、この炎のようなエネルギーは、夢の中の出来事ではなく、実際の現実で起きているものなのです。

現実として常に宇宙に存在している、炎のような強い光は、目に見えなくても、私たちの知らないうちに私たちを守り支えてくれています。

目に見えないけれど日ごろ私たちを包んでいるものは、非常に多くあります。空気、風、波動、諸々のエネルギーなどなど、むしろ目に見えているものよりずっと多いのかも知れません。意識して、姿かたちのないものに改めて「目」を向けることにより、新鮮な「視点」が与えられます。つい目の前に見えるものばかりが気になっているとき、この「視点」を持つことを、絶対におススメします！



一ロメモ

月の光は、高性能カメラで精密に撮影されたものを観ても「幻想的」には感じません。見えないけれど、現実的に日常生活の上に注がれているエネルギーはたくさんあり、キリスト教では「聖霊の力」と表現されることがあります。理屈や理論では何とも解明しきれない部分にこそ、たいせつな気が内在しています。